

海外派遣留学プログラム報告書

(報告期間：2021/09/10 ～ 2021/09/30)

1. 勉学の状況

初週は、Czech Language and culture という、チェコ語を話せない留学生が最低限の生活をするためのチェコに関する授業がありました。授業は英語で開講され、英語の訛りの強い先生の授業の時は、聞き取るのが難しく、大変でした。しかし、日本に興味を持っている先生や、とても愉快でフレンドリーな先生がいたのでとても楽しく過ごせました。

2週目からは授業が始まりました。渡航前に受講を希望していた授業がなくなっていたり、受講を希望した授業の時間帯がかぶっていたりしたため、興味のある分野の授業はとりあえず見に行きました。自分の学部以外の授業も受講できるため、もともと興味があった環境や社会学に関する授業も見に行きました。各授業を受講するたびに教授と話をしましたが、どの先生もとても親切で安心して授業を受けることができました。また、ほとんどの学生が英語を外国語として学んでいるため、聞き取りやすかったです。授業形態は講義・ディスカッションなど様々でしたが、どの授業でも先生との会話も多く、生徒のテンポに合わせた授業でした。

2. 生活の状況

<友人との生活について>

渡航する前に、バディという、オストラヴァでの生活を支援してくれるチェコ人の学生と連絡を取り始めました。初めて異国の地に一人で行くため、とても不安に感じていたところ、バディが同じ時間にプラハ空港に到着する2人の台湾の学生を紹介してくれたため、プラハ空港で待ち合わせて一緒にオストラヴァまで行きました。オストラヴァの駅でバディと合流し、寮の手続きや案内をしてもらいました。

初週は welcome week という、歓迎イベントがたくさんありました。そのイベントにはたくさんの留学生が参加していたため、様々な出身の人と知り合うことができました。

銀行アカウントの手続き、学生カードの発行などオストラヴァで生活するための様々なことをバディがサポートしてくれました。バディには感謝してもしきれません。

初日に知り合った台湾の学生や台湾人と同室のトルコ人の学生はとても親切で、夕食を作ったり、どこか出かけたりするときは行動を共にするようになりました。友達の友達、というようなついでで、たくさん知り合いが増えました。また、「日本出身」というと、日本のアニメや文化に興味を持っている人が多く、うれしかったです。同時に、自分が他の国についてあまり知らないことにも気がつきました。

<寮生活について>

ほとんど留学生は大学の提供している寮で生活しています。寮の部屋は2～3人部屋で、だいたい同じ出身国の人で構成されています。私の部屋にも、もう一人日本人の学生が来る予定で

すが、その学生はビザの申請が遅れているため9月は一人で部屋を使用しています。寮のキッチン、トイレ、シャワー、洗濯機は共用ですが、平日は毎日掃除が入るためそれほど汚くはなく、家賃の割には心地よく使用できます。廊下ですれ違ったり、キッチンであった時に挨拶をしたり小話をするので同じ寮に住んでいる人同士のかかわりはとても多いです。

夜にはロビーに集まってゲームをしたり話したりします。チェコ人はビールが好きなひとが多く、また留学生もお酒を飲むのが好きな人が多いので、夜のイベントは頻繁に開催されます。

初めは慣れない英語での会話や一人の時間が少ないことにストレスを感じていましたが、時間が経つことで慣れました。

<入国について>

コロナ禍の渡航であったため、入国審査が厳しくなっていました。ちょうど渡航する2日前にEUが日本からの渡航を制限することを発表していたため、飛行機の時間の3時間前まで渡航を迷いました。しかし、ここまで準備してきた自分や渡航後の生活を夢見て渡航することを決めました。無事、乗り換えのフランクフルト空港でのシェンゲン協定国への入国審査も通過し、チェコへの入国ができました。

<ビザについて>

チェコへの長期留学には2つのビザのタイプがあります。一つは「長期就学ビザ」という、日本での手続きのみで渡航できるが、発行に時間のかかるビザです。もう一方は「長期滞在許可」という、チェコでの手続きが必要だが、すぐに渡航できるビザです。コロナ禍で渡航の判断が遅れたため、私は「長期滞在許可」を申請しました。

私は、オストラヴァの内務省での手続きを指示されました。しかし、内務省や寮との手続きはとても複雑で、きちんとした手続きができたのは渡航してから10日目でした。慣れない外国での手続きの負担を考えると、早くから長期就学ビザの発行を申請すればよかった、と後悔しました。

海外派遣留学プログラム報告書

(報告期間：2021/10/01 ～ 2022/03/06)

1. 勉学の状況

Winter semester について (2021年9月～2022年1月)

受講したのは Intercultural Communication, Sociology of Migration, Sociology of Work, History of Central Europe, Global Environment Problem の5つだ。

オストラヴァ大学の授業を1学期受けて感じたのは、学生の積極性だ。ディスカッション形式の授業も多く、講義の授業であったとしても学生の発言が多かった。日本では、学生に何か意見があったとしたら挙手して先生からの指名を待つのが当たり前だと思うが、オストラヴァ大学の授業では、学生が意見のある時は指名なしで発言することも多かった。また、学生の政治関心が高いことも分かった。日常会話で政治について話すことが多く、それぞれが政治に対する意見をしっかりと持っている。そして、だいたいの学生が英語を話せるため、チェコの学生とも問題なく会話できた。日本にはない良いところがたくさんあるため、毎日刺激的で常に学びの繰り返しだ。

特に Intercultural Communication は一番興味深い授業だった。これはディスカッション形式の授業で、先生一人に対して生徒10名程度で提示されたお題に対してそれぞれの意見を言うていくものだった。「日本出身」というと意見をもとめられることが多く、最初は自分の意見をうまく話せなかったり、急に指名されることに戸惑いを感じたりした。そこで毎回の授業で、自分の中で目標を立ててそれを達成するように努めた。やはり自分の周りはレベルの高い人だらけなので落ち込むことも多かったが、最終的には授業で知り合った学生と仲良くなれたり、先生に自分のエッセイを評価してもらったりしたため、成長した部分があったのではないかと思う。Sociology of Migration と Sociology of Work は名前にもあるように社会学の授業だ。これらの授業では日本的な観点が求められ、日本の状況についてプレゼンテーションを行ったりもした。もちろん自分は日本人であるため、日本については詳しいと思っていたが、自分にとっては当たり前のことでもほかの国出身の学生にとっては当たり前でないことが多かったため、日本について知る機会にもなったと思う。

Summer Semester について (2022年2月～)

受講するのは、America after 11/9, Central Europe in Middle Ages, Flamenco, Global Sociology, Intercultural Communication だ。今回は faculty of education と faculty of social studies の、自分の学部とは異なる学部の授業を2つ受講することにした。Intercultural Communication は前学期に受けた授業と同じ名前だが、先生が異なるため、授業の内容も異なりとても興味深い。America after 11/9 と Central Europe in Middle Ages は歴史に関する授業で、歴史を専門に学んでいない私にとってはとても難しいため、予習などをしっかり行って受講しようと考えている。

2. 生活の状況

10月以降から Winter Semester の間は日本人の学生一人とタイからの学生一人が私の部屋に来て三人で暮らすことになった。最初は人と一緒に暮らすこと自体にストレスを感じていたが、少しずつ慣れて、特に大きなトラブルもなく一緒に暮らすことができた。また、新学期から新しい学生が来て、寮の中の治安が悪くなった。私は誰かにナイフと洗剤を盗まれた。比較的治安がいいと言われているチェコ共和国だが、今一度危機管理をきちんとしようと思う。

部屋から一步出れば違う国出身の学生がたくさんいるため、ほかの国の文化を知る良い機会になった。仲良くなった学生とは夕食を一緒に食べたり、休日を一緒に過ごしたりした。

食事に関して、私はチェコのレストランの食事があまり好みではなかったのと、節約したいと考えたため、自炊することが多い。チェコのスーパーでは薄切り肉が売っていなかったり、アジアの調味料が高かったりするため、自炊に慣れるまで少し時間がかかった。首都のプラハに行ったときにまとめて日本の調味料を買ったり、オストラヴァには韓国食料品店があるためそこでアジアの食品を買ったりしている。

渡航してから約5か月が経ち、こちらの生活に慣れてきた。5か月たった今でも、やはりオストラヴァに留学に来てよかったと思っている。思うようにいかないことも多いが、残り半分の期間を悔いのないよう過ごしていきたいと思う。

海外派遣留学プログラム報告書

(報告期間：2022/03/07～2022/06/21)

1. 勉学の状況

Summer Semester は America after 11/9, Flamenco, Global Sociology, Intercultural Communication, Russian for foreigners を受講した。中間報告書を書いた時点では Central Europe in Middle Ages を受講する予定だったが、その代わりに前から興味があったロシア語を勉強することにした。

Summer semester の授業は先生やほかの学生とたくさん話をしながら進めていくような授業が多かった。フランクな先生が多いため、先生ともすごく仲良くなれた。

Winter semester をすでに経験しているため、難しいと感じることが少なかった。そのため、積極的に授業内で発言をするようにした。留学の最初の方は一言の発言すらできなかった自分が大勢のクラスメートの前で発言できるようになり、すごく自分の成長を感じた。

Russian for foreigners では学期末にテストがあった。テストに向けて友人と夜な夜な勉強したかいがあり、無事テストは合格した。

2. 生活の状況

留学生活の最後の方に差し掛かったため、チェコでの生活にはとても慣れてきていた。

Summer semester に入って寮で生活するメンバーが変わり、寮の中で自分のものが盗まれたりなどしたことも何度かあった。ものに対する価値観の違う人たちとの生活は大変なことも多かったが、自分の意見をきちんと伝えたり、困難に対して協力して立ち向かうことは自分の成長につながったと思う。

親元から離れて長期間生活するのが初めてだったことや、チェコは天候の変化が激しいこともあり、体調を崩すことが多かった。最後の2か月くらいは、残されたチェコでの生活をもっと有効に利用しようと思い、無理をしてしまったため、心理的にも体調的にも疲れてしまったことがあった。体調管理をきちんとするという部分でもこの留学生活を通して学んだ。

長い期間ほかの国出身の学生とともに暮らしてきたため、親友と呼べるくらい深い仲になった学生もいた。自分とは異なる価値観からたくさんのアドバイスをもらい、出身の国が違っても支えあえることに気が付きとてもうれしい気持ちになった。留学先で出会った学生とは今でも頻繁に連絡を取り合っている。コロナの状況がよくなったら友人の国に訪問してまた会いたいと思う。

ロシアとウクライナの戦争が原因で、チェコにはたくさんのウクライナからの難民の家族が生活していた。私の暮らしている寮にもたくさんのウクライナからの家族が生活していた。そこで私はウクライナの難民の子どもたちの世話や英語を教えるボランティア活動に参加することにした。ウクライナではウクライナ語とロシア語が公用語であるため、言葉が通じず大変なことが多かった。そこで私はロシア語の授業を受け始め、少しでもコミュニケーションが取れるように工夫をした。チェコで生活することで新しいことを経験出来てとても新鮮だった。

日本に帰国してからは、家族や友人に会えたり、久しぶりの日本食を楽しんだりとても充実した生活を送っていたが、しばらくしてから留学先の生活がとても恋しくなった。留学に行く前は不安でいっぱいだった留學生活だったが、日本ではできない経験をたくさんし、勝手にできないとあきらめていたことも自分の努力次第で可能になることが分かった。コロナ禍での渡航は難しいことの方が多かったが、周りの人にたくさん助けをもらいながらも挑戦して本当に良かったと思う。